

中部の

エネルギーを 築いた

人々

木曽川開発の地元対策に活躍し

大同電力副社長となった **村瀬末一**

村瀬末一は木曽川開発の地元対策責任者として活躍し、後に大同電力副社長となった。福沢桃介に直接諫言できる数少ない人物の一人であった。村瀬は、明治15(1882)年1月、岐阜県本巣郡網代村に、土族村瀬與平の三男として生まれた。與平は地元の名望家ではあったが維新で家禄を失い、末一が8、9歳のときに逝去した。兄鎌次郎が家計を支え、村瀬は貧窮の中で育った。志の高い村瀬は慶応義塾への入塾を望み、月謝、食費のみを補助して

貰い、貧書生として苦学しながら、明治40年、法律科を卒業した。

卒業後古河鋳業に入社したが、同年12月、一年志願兵として入隊し、除隊後は門司支店勤務となった。明治42年に、母校慶応義塾の教師に招かれ、法制経済、法学通論を講じた。明治43年、慶応の先輩名取和作(東京電灯営業課長)の斡旋で東京電灯に移り、京橋出張所に勤務した後、大正2年に福沢桃介と会い名古屋電灯へと転じた。当初は名取和作が行く予定だったが都合で行けなくなり、代わって村瀬が名古屋電灯入りした。当時福沢は名古屋電灯常務取締役として本格的に電気事業に乗り出そうとしていた。



村瀬末一



福沢桃介(45歳頃)
出典：『福澤桃介翁傳』

名古屋電灯臨時建設部 串原仮発電所の建設

名古屋電灯に入社後、村瀬は調査課長に就いたが、第1次大戦が勃発して一時第三師団付となった。大正5年2月、名古屋電灯に臨時建設部が設けられ、総務課長に就任する。臨時建設部は第1次大戦勃発による需要急増に対処するため、発電所の新增設を担う専門部署として設置された。事務系の責任者として村瀬は目覚ましい活躍を見せる。



串原仮発電所

村瀬の評価を高めたのは、矢作川筋に建設された串原仮発電所の成功である。当時、名古屋電灯は需要申込に応えられない状況が続いていた。串原仮発電所(2,000kW、大正7年6月運転開始)は、既に着工していた串原本発電所(6,000kW)の水路の上流半分の建設

を急ぎ、長良川発電所の予備機を流用して臨時発電所を設けるものであった。異例の工事で官庁許可に奔走し、次々起きる地元問題の処理に当たった。話がつかず一旦明知町まで引き上げると、今度は地元村長が心配して追いかけてきて交渉し直すという一幕もあった。

木曾電気製鉄支配人 木曾川開発に尽力

大正7年9月に、臨時建設部を独立し木曾電気製鉄が設立されると、村瀬は支配人に就任し、木曾川開発の地元対策の先頭に立った。最初の発電所である賤母発電所(12,600kW、大正8年7月運転開始)の建設では、「風景保存」の要請が地元から持ち上がり、その取りまとめに奔走した。「庶幾くは一層の風致あらしめんと取水口及び賤母公園等に春花秋葉の眺望を添え、水路付近の土砂を捨てたる河畔にも亦桜を植え楓を移して景色を彩り発電所の右手には小公園を設備して騒客の逍遙に任じ」と(『賤母水力』)、村瀬は回想している。

引続き大桑発電所、読書発電所などの建設や、大井川発電所、落合発電所などの水利申請が行われたが、村瀬は、福沢桃介の厚い信頼の基に、地元対策や官庁手続の処理に卓越した手腕を発揮した。水路用地や送電用地の

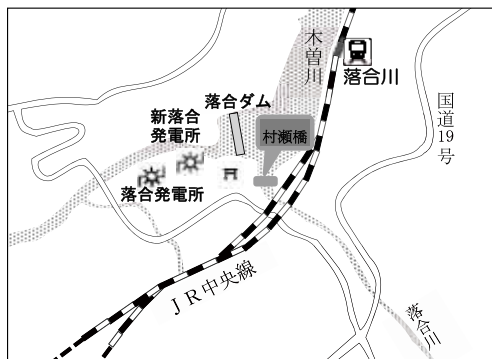


賤母発電所(関西電力提供)

交渉のために、冬期厳寒の中、徒歩で地主や有力者の説得に歩いて回り、福島町の了解を得るため慶応時代の同窓生、小野秀一(福島町出身、後の大同電気製鋼所取締役)と組んで説得にあたった。落合発電所(大正15年12月運転開始、14,700kW)の工事に設けられた木製吊り橋は、村瀬の功を称え、「村瀬橋」(大正15年完成)と名付けられている。



落合発電所にかかる村瀬橋



落合発電所・村瀬橋付近図

大同電力副社長、関連会社経営

大正10年2月に大同電力が設立されると、村瀬は取締役支配人として引き続き大井発電所等の建設に取り組み、「村瀬氏の大同」と言われた。大正14年に常務取締役に昇進

し、福沢が引退した昭和3年には副社長に栄進する。しかし、昭和恐慌で業績が悪化し減配を余儀なくされると、昭和6年、大同電力は副社長制を廃止し、村瀬も取締役に戻った。村瀬は、昭和電力、北恵那鉄道、豊国セメントなどの社長に就任したほか、大同電気製鋼所、昭和曹達、矢作水力、姫川電力、三信鉄道などの取締役、監査役となり、福沢関連の多くの会社の経営を担った。村瀬が社長を務めた会社について見ると昭和元年に設立された昭和電力は、庄川筋に祖山発電所（昭和5年12月、47,500kW）を建設し、大阪送電幹線を有する大同電力の最も重要な関連会社であり、北恵那鉄道は大井発電所建設にあたり、裏木曾御料林の木材流送補償として設立された鉄道である。また、豊国セメントは福沢桃介が社長を務めたセメント会社で、大正11年8月、名古屋セメントを合併し名古屋市（大江町）に工場を持っていた。

敢闘精神に溢れた村瀬には社内外からの批判も多かった。「電力国国有が実現したからと云って電力料金が低廉となることは絶対にあらうべらざること」（『新愛知』昭和11年6月30日）と発言するなど、村瀬は電力国家管理にも批判的で、日本発送電

設立後も要職につかなかった。その後は電気事業経営の表舞台に立つことなく、北恵那鉄道社長などを勤め、昭和28年3月、71歳で没した。
（浅野 伸一）



昭和電力祖山ダム(関西電力提供)



北恵那鉄道(出典：吉村毅『懐かしの北恵那鉄道』)



豊国セメント名古屋工場